

酔っぱらい星

小川未明

青空文庫

佐吉さきちが寝ねていると、高窓たかまどの破れやぶから、ちらちらと星ほしの光ひかりがさしこみます。それは、青あおいガラスのようおほにさえた冬ふゆの空そらに輝かがやいているのであります。

仰あおむ向けくぶくになつて、じつとその星ほしを見みつめていますと、それが福ふ々くぶくしいおじいさんの顔かおになつて見みえました。おじいさんは、頭あたまに三角帽子かくぼうしをかぶつています。そして、やさしい、まるまるとした顔かおをして、こちらを見みて笑わらっています。佐吉さきちには、どうもこのおじいさんが、はじめに見みた顔かおでないような気きがするのであります。

「どこで、このおじいさんを見みたろう。」と、佐吉さきちは考かんえながら、

ほし^みあ
星を見上げていますと、さまぎまの幻^{まぼろし}め^うつ
ました。

きよねん
去年の暮^くれのことでありました。佐吉^{さきち}が独り町^{ひとまち}を歩^{ある}いていま
すと、いつもは寂^{さび}しい町^{まち}でありましたけれど、なにしろ年^{とし}の暮^くれ
のことですから、人々^{ひとびと}が急^{いそ}がしそうに道^{みち}をあるいていました。

しょうてん
また、商店^{しょうてん}は、すこしでもよけいに品物^{しなもの}を売^うろうと思^{おも}つて、
みせさき
店先^{みせさき}をきれいに飾^{かざ}つて、いたるところで景気^{けいき}をつけていました。

さきち
佐吉^{さきち}は、それらの有^あり様^{さま}をながめながら歩^{ある}いていますうちに、
きようかいどう
ある教会^{きようかいどう}堂^{まえ}の前にさしかかったのです。ちようどその日^ひは、

まつ
クリスマスのお祭り^{まつ}でありましたので、その教会^{きようかいどう}堂^{なか}の中には
ぎやかでありました。ここばかりは、平^{へい}生^{せい}からだれがはいって

もいと聞いていきましたので、佐吉は、おそるおそる入り口まで
 近寄つてその内をのぞいてみますと、そこには、子供や、大人が
 おおぜい集まっています。いい音色のする音楽につれて、み
 んなは楽しそうに唄をうたっていました。そして、一本の脊の高
 い常磐木を中央に立てかけて、それには、金紙や、銀紙
 が結びつけてあり、また、いろいろの紅や、紫のおもちやや、珍
 しい果物などがぶらさがっていました。

また、そのそばには、大きな袋を下げた、おじいさんの人
 形が立っていました。そのおじいさんは、どこからか雪の中を
 さまよつてきたものと見えて、わらぐつをはいていました。そし
 て、脊中には、真綿の白い雪がかかっていました。なんでもおじ

いさんは、灰色はいいろのはてしない野原のほらの方ほうから、宝たからもの物ものを持つてやつてきて、この町まちの子供こどもらを喜よろこばせようとするのでありました。佐吉さきちは、そのとき、そのやさしそうな、おじいさんの顔かおをなつかしげに見みたのですが、どこか、星ほしの中なかにいるおじいさんの顔かおが、それに似にているようでありました。

また、これはあるときのこと、春はるであつたと思おもいます。佐吉さきちは、一人家ひとりいえの外そとに遊あそんでいました。佐吉さきちの家いえは貧びんぼう乏ぼうでありましたから、ほかの子このように欲ほしい笛ふえや、らっぱや、汽き車しゃなどのおもちやを買かつてもらうことができなかつたのです。

それで、ぼんやりとして路みちの上うえに立たつていますと、あちらから、いい小鳥こどりのなき声こえが聞きこえたのです。圃はたけには、花はなが咲さいていまし

たから、その花はなを訪たずねて、山やまから小鳥ことりが飛とんできたのだらうと思おもつて、いいなき声こゑのする方ほうを見向みむきますと、おじいさんが、たくさんの鳥とりかごをさおの両方りょうほうにぶらさげて、それをついでこちらにやつてきたのであります。佐吉さきちは、そのそばに駈かけ寄よつてみますと、かごの中なかには、名なも知しらないような小鳥ことりがはいつていて、それがいい声こゑでなっていました。

佐吉さきちは、笛ふえや、らっぱや、汽車きしやや、そんなようなおもちゃなどはいらぬから、どうかして、その小鳥ことりが一羽わほしいものだと思おもつて、そのおじいさんの後あとについていきました。いつまでも後あとについてくるので、おじいさんは、立たち止どまって振ふり向むきました。

「坊ぼうは、そんなに鳥とりがほしいのか。」といって、おじいさんは笑わら

いました。

佐吉は、目を輝かして、黙つてうなずきました。すると、おじいさんは、肩からかごを下におろして、腰からたばこ入れを取り、きせるを抜いて、すばすばとたばこを喫いはじめました。

「坊が、そんなにほしいなら、一羽やろうかな。」と、おじいさんはいいいました。

佐吉の小さな心臓はふるえました。耳たぶがほてつて夢ではないかと思ひました。おじいさんは、どれでもほしい鳥をやるといいましたので、くびまわりの赤い、かわいらしいうそがほしいと答えました。

そのおじいさんは、ほんとうにいいおじいさんでありました。

その鳥をかごから出して、佐吉にくれました。佐吉は、天にも飛び上がるような気持ちで家へ持つて帰りました。そしてかごの中に入れて、大事に飼つたのであります。うそはすぐそのかごに馴れて、毎日戸口の柱に懸けられて、そこでいい声を出してさえずっていました。佐吉は、このうえなく、うそをかわいがりました。

佐吉のお母さんは、やさしいお母さんでありましたが、ふとした病気にかかりました。佐吉は、夜昼しんせつにお母さんの看病をいたしました。けれど、お母さんの病気は、いつなおるようすもなく、だんだん悪くなるばかりでしたから、どんなに佐吉は心配したかしれませぬ。しかし、そのかいもなく、お

母かあさんは死しんでしまわれました。佐吉さきちは悲かなしみました。しかもその間あいだに、うそに餌えさをやることを忘わすれていましたので、あれほどまでにかわいがつていたうそまで、また、いつのまにか死しんでしまいました。

お母かあさんに別わかれ、うそが死しんでからというものは、佐吉さきちは、さびしい日ひを送おくりました。お父とうさんは、正しょう直じきない人ひとでしたけれど、なにしろ家いえが貧ますしかったので、佐吉さきちに、思おもうように勉べん強きよをさせたり、佐吉さきちの欲ほしいものを買かつてくださることもできませんでした。お父とうさんは朝あさ、仕し事ごとに出でて、日ひが暮くれると帰かえつてきました。いままでは、日ひが暮くれてからのお使つかいは、たいていお母かあさんがしましましたが、お母かあさんの死し後ごは、佐吉さきちがしなければなり

ませんでした。

「佐吉や、お酒を買ってきてくれ。」と、お父さんにいわれると、佐吉は町まで酒を買いにいかなければなりませんでした。そして、まったく夜になって、床の中に入りますと、いつも高窓から一つ星の光がもれてさすのでありました。それを見つめていきますと、それが星でなくて、やさしいおじいさんの顔になって目に映るのでありました。その顔が、佐吉にうそをくれたおじいさんの顔のように思われたのであります。

佐吉は、夜ごと、その星をながめて空想にふけりました。そこで、そのうち手足の寒いのも忘れて、いつしか快い眠りに入るのがつねでありました。

ある冬の、木枯らしの吹きすさむ晩のことでありました。

「佐吉や、お酒を買いにいってこい。」と、お父さんはいいまし

た。佐吉は、びんを握って出かけました。雪が、凍っていました。

空は青黒くさえて、星の光が飛ぶように輝いていました。雪

路を寒さに震えながら町までいって酒を買って、佐吉は、また、

路をもどってまいりました。

広い野原はしんとして、だれ一人通るものもなかったのです。

黒い常磐木の森が向こうに黙って浮きでています。風が中空を

かすめて、両方の耳が切れるように寒かったのであります。

このとき、不意に前に立ちふさがったものがありました。佐吉

は驚いて見上げますと、おじいさんがにこにこ笑っていました。

佐吉は、なんとなく、見覚えのあるおじいさんのように思いましたので、じつとその顔を見上げていますと、

「あ、寒い、寒い。酒を飲ましておくれ。」と、おじいさんはいました。

佐吉は、びんを隠すようにして、「これはお父さんのところへ持つていかなければならぬのだから、おじいさんにあげることができない。お父さんが、家で待っているのだから。」と、答えました。

「たまには、お父さんは我慢するがいい。今夜は、あまり寒くて、私はとてもやりきれない。毎晩、おまえの安らかに眠るように見守っているが、たまらなくなつて降りてきたのだ。」と、おじ

いさんはいいました。

そういわれると、なるほど、毎晩、寝ていて見る空のお星さまでありました。そして、はじめて気がつくとき、おじいさんは、頭に三角の帽子をかぶっていました。

佐吉が、どうしたらいいものだろうと、あつけにとられていまして、おじいさんは、彼の手から酒びんを奪って、トクトクとびんの口から、音をさせて自分の口に酒をうつして、さもうまそうにすっかり飲み干してしまいました。

「あ、これでやっという気持ちになった。もうどんなに風が吹いても寒くない。」と、独り言をいいながら、脊の低いおじいさんは、よちよちと凍った雪の上を歩きはじめました。

佐吉は、お父さんにしかられはしないかと、心配しながら家に帰つてきました。そして、おじいさんに酒を飲まれてしまったことを、父に話しますと、はたして、父は、佐吉をばかだといつてしかりました。

「おまえは、きつねにだまされたのだろう。それでなければ、転んで酒をこぼしてしまつたにちがいない。」と、父はいつて、佐吉の話信じませんでした。

それからまもなく、佐吉は床の中にはいりました。そして、いつものように高窓の破れから空を仰ぎますと、不思議にも、ちようど、三角な帽子を頭にかぶつたおじいさんが、よちよちと転びそうに、大空を上つてゆくのでありました。

霜しもが降ふるかと思みえて、空そらは光ひかつています。そして星明ほしあかりに青あ黒くろいガラスのようそらにさえた空そらは、すみからすみまでふき清きよめられたごとく、下界げかいの黒くろい木立こだちの影かげも映うつるばかりでありました。

おじいさんは、一寸法師すんぼうしのようのぼに、だんだん高たかく、高たかく、目めに見みえないなわをたぐつて上のぼりましたが、酒さけに酔よつていますので、右みぎに転ころげ、左ひだりに転ころげそうにしています。ふと、その拍子ひょうしに頭あたまに載のせていた三角かくの帽子ぼうしがおおつちました。帽子ぼうしは、きらきらと小ちいさな火ひの子このようこにひらめいて下したに落おちてきました。はつと思おもつて佐吉さきちは、すぐとこに床とこから起おき上あがろうとしましたが、また、明あ日したいってみようと思おもいなおして、そのまま眠ねむつてしまったのであります。

夜が明けてから、佐吉は、父親といっしよに、昨夜おじいさんにあつた野原へいってみました。すると、ちようどおじいさんの帽子の落ちたあたりに、銀色に光つた三角の小さな石が一つ、真つ白な雪の上に落ちていました。

「これは珍しい石だ。」と、父親はいいました。二人は、その石を拾つて家に帰りましたが、しばらくたつてから、その石を、大金を出して買った人がありましたので、貧乏な親子は、急に幸福な生活を送つたということです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1920（大正9）年1月

※表題は底本では、「酔《よ》っぱらい星《ぼし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

酔っぱらい星

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>